

随想



愛知淑徳中学校
国語科教師

高橋 よしの

3月に入ると、土から朽葉や水仙やチューリップが芽吹く。赤や黄緑の芽の先端を見せ少しずつ成長していく。そして3月は一年間で最後の授業を迎える。いつものように生徒がスピーチを発表する。中学一年生の3学期のタイトルは「私の紹介したい本」。その日の担当者は「世界から猫が消えたなら」という本を紹介した。「ほとんどの大切なものは失われてから気づく。青年の亡き母が言った言葉が一番好き、深い本です」と紹介した。真剣に傾聴している静寂なひと時を生徒たちと共有する。興味や感動の芽が心に芽生えたかのように。「本当にいい言葉だね」、「私もその本読んでみようかな」などなことをそれぞれが思っているのだろう。最後の授業でどうしても紹介したいと生徒が『グラスホッパー』を紹介した。私はスピーチの後、発表者に聞きたいことはなにかと誰かにあててるが、その日は「私も聞きたい」といくつも手が上がった。「なぜ『グラスホッパー』っていう題名なのか」。それに応える発表者と質問者のコミュニケーションが成り立つ。それをみんななどにもするのも楽しい。

国語の授業の3分間スピーチは私が愛知淑徳に就職して36年、ずっと変わらずに続いている。私にとってこの時間が生徒との交流の時。「あっ、そうなんだ」と胸に感動の芽が

土から芽吹くような感動の体験をもち続けたい！

膨らむこともある。思いつきりの力と表現が發揮されたり、何気ない言葉や視点に出会ったり。

でも、教師としてのこの感動の体験も必ず終わりが来る。土から芽吹くような感動の体験を持ち続けたい。その思いが、今、私にバイオリンのレッスンを継続させている。あー告白してしまった、独学でバイオリンをやっていることを。息子たちのレッスンを思い出し、毎日、少しずつバイオリンを手にした。できない自分に向き合いながら、目標であったビバロディの協奏曲 In A Minor が弾けるようになった。子どものレッスン方法に学び毎日弾いていると、今まで弾けなかったフレーズが弾けたり、何気ない美しい音に出会える。その時心に感動の小さな、小さな芽が膨らむ。60にしてやっと。でも、それがうれしくて、一歩前へ進む。

